

● 読書感想文コンクール 中学校の部 ●



岡 泉希 (おか みづき) 松木中 1年生

作品名：希望と絶望、そして未来へ

図 書：希望ヶ丘の人々

「命」。私がこの本を読み終えて最初に浮かんだのはこの言葉だった。物語の要となる圭子は風邪もひいたことがないぐらい健康だった。そんな圭子に見つかったガンはすでに末期の状態で、余命を宣告された田島は、「希望とはなんだー？絶望とはなんだー？」と思った。「希望」と「絶望」。それは、「つながるもの」と「絶たれるもの」だと私は思う。絶たれてしまった圭子の命は、家族にとって「絶望」でしかなかったかもしれない。圭子が亡くなってしまった過去は変えることができない。だが、未来は変えていける。その命を「希望」として未来につなげていくのが家族だと思う。

美嘉は、圭子が最後の最後まで、教師の仕事に誇りと責任を持ち続けていたのを見ていたから、教師になりたい。圭子の命を最後まで救おうとしてくれたのを見ていたから、医療の仕事に就きたい、と考えるようになった。圭子の命は美嘉の未来につながっていく。圭子がくれた「希望」は美嘉の未来につながっていく。亮太は圭子のふるさと「希望ヶ丘」で、圭子の思い出を探し続ける。圭子が小学生の頃に通っていた、瑞雲先生の書道教室に通うようになる。田島自身も、圭子の中学生時代の同級生、フーセンさんやエーちゃん、チクリ宮嶋の語ってくれる思い出によって、今まで知らなかった圭子と出会う。命というものは、たとえ絶たれてしまっても、家族や友人の心の中には思い出としていつまでも残り、消えることはないと思う。

もう一つ、私が「命」を感じたのは、一時期危うくなりかけたチヨさんの命。チヨさんが昼過ぎからちゃぶ台に突っ伏していたのに、瑞雲先生は気にも止めなかった。そのため、病院に搬送されるのがおそくなってしまった。チヨさんは脳梗塞で、助かる可能性は五割以下。それは、まだ「希望」があるということだった。その命が助かったのは、瑞雲先生やショボのおかげだと思う。苦労していたとしても、瑞雲先生と一緒にいられて幸せだっただろうし、空回りばかりだけど、かわいい孫のショボがいて幸せだった。この二人の存在が、チヨさんにとっての幸せだったのだと思う。大切な人と思い出を重ねられること、共に時間を過ごせること、それが本当の幸せなのではないだろうか。この出来事を機に、瑞雲先生とショボが理解し合えるようになり、命

の大切さを改めて実感させたのだと思う。

私も美嘉と同じで、将来は教師になりたいと思っている。小学校の時の担任の先生の姿や、今も中学、高校で教師をしている父親の姿を見て、自分が今までにもらった「希望」を子供たちに伝えたい、子供たちに「希望」を与える存在になりたいと思うようになった。そのために、他人の気持ちをわからうとする努力ができる人でありたい。

私も大切な人を失ったことは、何度かある。その時は、やはり「絶望」でしかなかった。苦しかったし、悲しかったし、悔しかった。でも、その人がくれた言葉や思い出が、私に「希望」をくれた。その人との、大切な思い出があるから、人々は「絶望」から立ち上がり、「希望」へと歩んでいけるのではないかと思う。